第４回京都府教育振興プラン改定に係る検討会議概要

１　日　時
令和２年 10 月 16 日（金）10 時～正午

２　場　所
京都産業大学むすびわざ館３階　301 教室

３　出席者
委　員　原座長、青山委員、大野委員、岸本委員、佐藤委員、中山委員、村田委員
府教委　前川教育次長、山本教育監、大路管理部長、山口指導部長　他
※橋本教育長は中教審総会のため欠席

４　内　容
新しい「京都府教育振興プラン」の第２次素案について

【次　第】
・教育次長あいさつ
・事務局からの説明
・意見交換・協議
新しい「京都府教育振興プラン」の第２次素案について

５　資　料
資料１　配席図
資料２　第２期 京都府教育振興プラン（第２次素案）
資料３　今後の検討会議の進め方

＝＝詳　　細＝＝

■前川教育次長あいさつ
教育長に代わりまして、私から一言御挨拶を申し上げます。
委員の皆様におかれましては、御多忙のところ御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。
コロナ禍で始まりました令和２年度も半年が過ぎ、年度の後半を迎えました。学校の行事等も落ち着いてきたところですが、府内の学校では、年度当初から約２か月間の臨時休業を行うこととなりました。学校現場の状況を聞き取りますと、心配されていた授業の遅れは、この９月までに概ね取り戻すことができているとのことです。運動会や文化祭、修学旅行などの学校行事も、様々な制約や代替行事への変更はあるものの、子どもたちの学校生活の思い出として実施できるように工夫が凝らされているところです。しかしながら、長時間のグループ学習などは実施が難しく、新学習指導要領に掲げる「主体的・対話的で深い学び」への影響が懸念されているところです。
国においてはデジタル庁の創設など、デジタル化・ICT 化について急速な動きが進んでいます。府内の学校では、臨時休業中も含め、ICT を活用した学び等について、学校ごとに差はあるものの、コロナ禍をきっかけに進んでいます。学校の施設の活用も含めた部活動の地域移行といった教育改革も急速に進んでいます。
この検討会議で御協議いただいてまいりました新しい振興プランについても、そうしたコロナ禍の経験から得られた知見や加速する教育改革の動きも取り込みながら、本日は第２次素案として、全体像に近いボリュームのものをお示しいたしますので、引き続き御意見を賜れば幸いでございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

■事務局からの説明

石澤総務企画課長から資料２により説明

■意見交換・協議

＜推進方策１について＞

○これまでの検討会議において、熱心に議論を重ねる中で出てきた重要なキーワードやセンテンスが網羅的に盛り込まれており、大変充実した内容になっている。

○推進方策１が「質の高い学力の育成」、２が「豊かな人間性の育成」となっているが、教育分野の計画であるなら「豊かな人間性の育成」が１番目であるべきではないか。

○ICT の活用について、子どもたちの学習の保障と教員の働き方に関する記述が多くあり、子どもたちが学習において ICT を活用することはイメージしやすい一方で、ICT を一番気軽に使えるのは日常的なコミュニケーションの場面である。学習活動に限定するのではなく、広範囲にわたっていろいろな活動で使っていくことが求められている。

○情報モラル教育は日進月歩であり、テクノロジーが変われば在り方も考え方もルールも変わる。教員も子どもたちも世の中も、何が本当でそのルールが本当に正しいかはわからない。教員も子どもも一緒に学び、一緒に考えていくというスタンスやマインドが非常に重要である。ルールを先に固めてしまうと、陳腐化・形骸化し何のためのルールなのかわからなくなってしまい、それが ICT 推進の阻害要因にもなってきた。

○情報セキュリティや情報モラルを理解することは、ICT 時代においてより重要になる。現在「情報社会のルールを守る態度」と記載している箇所を、これからの時代において、ある種のキーワードになるだろう「リテラシー」という言葉で敢えて表現してはどうか。

○府教育委員会は、これまで「京都式少人数教育」を進めてきたが、主な取組には「少人数指導体制を整備します」と記載されており、少人数学級だけを進めていくように捉えてしまう。

○主体性という言葉が何度も使われており、意識していることがよくわかる。その方向性で進めていただきたい。

○「主体性を持ちましょう」という啓発だけではなく、「主体性をいかに失わせないか」ということも重要である。言った意見が否定されない・笑われないことはとても大切であり、そのような安心・安全な学校環境が道徳の心をはぐくむ背景になる。

○「身の回りにあふれる情報の真贋を見抜く力」については、その背景に何があるのかまで思い至り、考え、何が問題のポイントであるかを見抜くことが大切である。

○「情報の真贋」という言葉は難しい。振興プランは教育現場の方だけでなく保護者にも読んでもらいたいものであり、「身の回りにあふれる情報の中から正しい情報を見抜く力」など、もう少しわかりやすい言葉で書いてほしい。

○現代社会において子どもたちに必要な「発信力」のような言葉がキーワードや方向性として含まれていても良いのではないか。

○幼稚園から小学校、小学校から中学校、中学校から高校と、ずっと引き継いで見守ってもらえるというまさに「包み込まれた中での教育」が府立高校ならではの魅力ではないか。校種間の接続を大切にする点は京都府の教育におけるポイントである。

＜推進方策２について＞

○推進方策１では「府立高校における学び」がかなりフォーカスされた内容だが、推進方策２でも、後半２つが前半４つに比べて限定的な印象で少し違和感がある。前半の４つに後半の２つもある意味では紐付いており、前半４つが追求されていくことで後半２つは成立・保障されていくものではないか。

○「寛容性」や「寛容さ」という言葉が入ると良いのではないか。そのようなニュアンスが書かれているところもあるが、明確に示す方向でも検討いただきたい。

○「折り合いを付ける力」という表現について、主体性を持って議論しているにもかかわらず、他者から誹謗や批判を受けたらそこで諦めて折り合いを付けるというようにも受け止められるため、「他者を理解する力」などにしてはどうか。

○「折り合える力」について、保育系や学童保育系の領域においてはネガティブな意味で使われない。自分の言いたいことを全て我慢して妥協するというよりは、自分と他者の意見や思いの違いを理解した上で調整・折衷していくという印象であり、ネガティブには感じない。

○「特別支援教育」について、これだけ細分化して書いていただいていることは非常に感慨深い。「合理的配慮」という言葉が使われていないが、子どもたちの尊厳だけでなく権利を守るという意味でも敢えて記載することを検討いただきたい。
○「通級による指導」は、専門的な知識を有している教員が非常に少ないことが課題であり、主な取組に「専門的な知識を持つ教員の育成」について書き込まれていることに非常に期待している。
○幼少期の教育は非常に重要な役割を果たすため、幼稚園だけでなく保育所や認定こども園も含めたすべての施設が連携を図りながら、義務教育だけではなく生涯の教育にどのようにつなげていくかを考えていく必要がある。まずは小学校と上手くつながることである。
○親が子どもに一番望むことは、元気で楽しく笑って家に帰ってきてくれること。いじめや暴力によって傷つく我が子を見ることは親として一番辛いことなので、「いじめや暴力を許さない学校づくり」「不登校の子どもたちに寄り添う教育」についてしっかりと書かれていることはとてもありがたい。
○新しいプランを策定するにあたり、府立高校 PTA 連合会で保護者を対象にしたアンケートを実施した。京都府の教育に対して多くの意見をいただいているが、プランの第２次素案には、保護者の思いがしっかり盛り込まれていると感じている。

＜推進方策３について＞
○スポーツなど身体の側面が強調されているが、いわゆる「心身」と捉えた場合の「心」あるいは「発達・保健」といった部分はどのように盛り込まれていくのか。現代社会においては、性に関する課題がいろいろな年齢層で生じており、自分自身の性とどう向きあうのか、他者の性をどう受け入れるのか、性別違和などの多様性の話だけでなく、個々の尊重の点でも重要である。
○多様性については、まずは教員が無意識の偏見について知ることが非常に大切である。プランに盛り込むかは別にして、性の話にもつながるものであり、そういった取組は必要である。
○「地域との協働による多様な部活動」の１文目が非常に長いので、２つに分けるなど工夫が必要である。
○「運動に親しむ習慣づくり」とあるが、習慣だけでなく「環境」も作っていただきたい。

＜推進方策４について＞
○「ICT の効果的な活用」という表現が多く使われているが、デジタルトランスフォーメーションのことを考えると、効果的であるだけでなく、効率的であることも大切である。ICT の基本的な機能は効率化なので、「効率」という言葉を入れた方が良い。
○コロナ禍でのオンライン授業について、日常的に ICT を使ってきた学校は対応できたが、そうでない学校は対応できなかったため、「日常的」という言葉も入れるべきである。
○「コーディネート力」にさらに「高い」という修飾語がついており、教員が非常に大変になると感じた。学校現場のことをアウトソーシングし、外部のコーディネーターやファシリテーターなどの存在が関わることがあっても良いのではないか。
○主な取組の中に「ショートムービーの作成」とあり、広報活動を充実させることには大いに賛成である。例えばプランに関するパブリックメッセージとして多様な方に配慮したデジタルコンテンツ（説明動画）を作るなど、このプランを広報していく際のプロセスもとても大きなメッセージになる。
○「車いすへの対応など」とあるが、車いすは物なので、「車いすユーザー」や「車いす利用者」など、人を指す表現に修正いただきたい。
○環境を整備するにあたり、最も重要な箇所のひとつとしてトイレが挙げられる。トイレと食べるところは力の源泉になり、また、トイレが綺麗ということは京都府の学校のアピールポイントにもなる。

＜推進方策５について＞
○「子育てがしやすい」という言葉がどこかにあれば、京都府が今重点的に子育て支援に取り組んでいることを表現できるのではないか。

○主な取組の中に「臨床心理士を『家庭教育カウンセラー』として配置する」とあるが、家庭教育に関する悩みは必ずしも心の問題だけでない。困難さが多様化してくることも考えると、専門性を一つに限定せず、「臨床心理士等」とした方が良い。
○「コミュニティ・スクールの設置」についてしっかりと書き込まれており、設置を進めようとしている市町教育委員会のステップアップにもつながる。
○本当にコミュニティ・スクールが全ての学校に必要なのか。作っておしまいになり機能していない場合や、OB の集まりとなり若手や現役が気を遣って何も言えなくなり、結果的に足を引っ張るなど何のためにあるのかわからない状況もある。
○コミュニティ・スクールの本来的な意義は、地域の教育力を活かすものであり、そのハブやシンボリックな存在になること。「地域とともにある学校」と「地域の教育力を活かす教育」の項目は分けてほしくない。「コミュニティ・スクールを作ったらこういうことをやりましょう」という意味でセットであるべき。地域の教育力を活かすために地域とともにある学校を作るというイメージで、二つの項目を一つにするべきではないか。
○総合的な探求とコミュニティ・スクールは一体であるべきであり、総合的な探求のインフラであるとさえ思う。それぞれの相互関係を仕組みとして作っていければ良いのではないか。
○総合的な探求と地域の活性化支援は一体的な視点で進めなければならない。府教育委員会が本気になって取り組めば、地元に密着した子どもや人材を育成できる。
○コミュニティ・スクールについて、費用対効果が高ければ続けていこうとなるが、連絡調整が効率的でなく非常に労力がかかる。教員が疲れないというコンセプトが必要で、疲れない仕組みを整える方法の一つに ICT の活用がある。

＜推進方策６について＞
○現代に残っている貴重な遺産が失われてしまうことはあってはならず、守り後世に伝えるためには、まずは府民一人一人にその価値を理解してもらう必要があり、上手く活用しながら保存に取り組んでいくことが大切である。